

地域会議の開催

- 地域ごとの課題や現状を把握するために1998年から懇談会スタイルの地域会議を各地で開催

石川・愛媛・神奈川・愛知・岩手・北海道・福岡・岡山・岐阜・大阪・埼玉・熊本・八戸・長野・静岡・福井・沖縄・群馬・島根

1999年、2002～2004年は全国牛乳容器環境協議会と共催

2004年度実施地域及び参加者数

6月22日 静岡市 40名

県、2市町、製紙メーカー、乳業メーカー、生協、NPO

8月26日 福井市 54名

県、1市、資源協同組合、乳業メーカー生協、量販店、NPO

9月29日 那覇市 34名

3市町村、古紙回収業者、学校栄養士、乳業メーカー、NPO

10月25日 伊勢崎市100名

農水省、県、10市町村、学校栄養士、自治ネット、乳業メーカー、NPO、商工会議所、製紙メーカー、古紙問屋、福祉作業所

11月16日 松江市 36名

県、2市、JA、生協、婦人連合会、製紙メーカー、乳業メーカー



伊勢崎市での地域会議の様子

地域会議と併せ、各地のリサイクル施設を視察

長野市リサイクルプラザ・八戸市リサイクルセンター・福井リサイクルセンター
浦添市リサイクルプラザ・伊勢崎市リサイクルセンター・松江市川向リサイクルプラザ 等



牛乳パックの回収ルールは市民自身で作り上げた

牛乳パックリサイクルは、市民がきれいな状態で「資源」として出すことを基本にしている。ごみと資源の区別化を徹底。

洗って、ひらいて、乾かして、最後は回収ボックスへ。

洗って



ひらいて



乾かして



回収ボックスへ

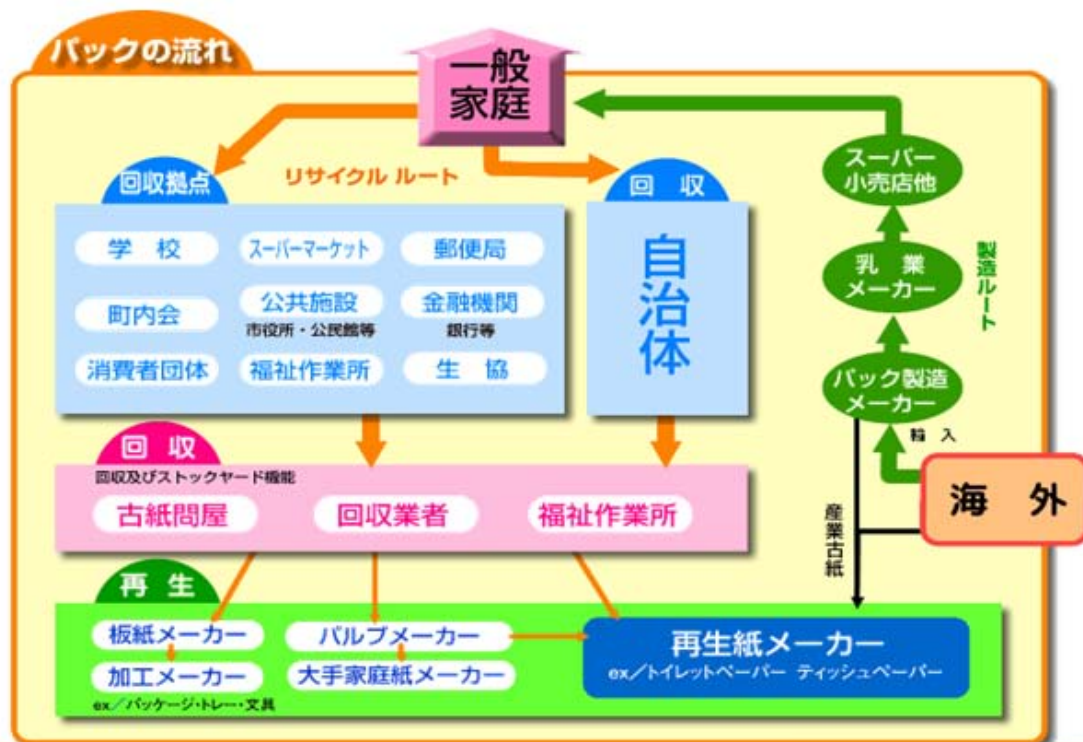


こんなものも、OKです



ジュースやコーヒー、ウーロン茶などの紙パックで出来ている容器はどれもOK（但し内側にアルミのないもの）

牛乳パックの回収の流れ

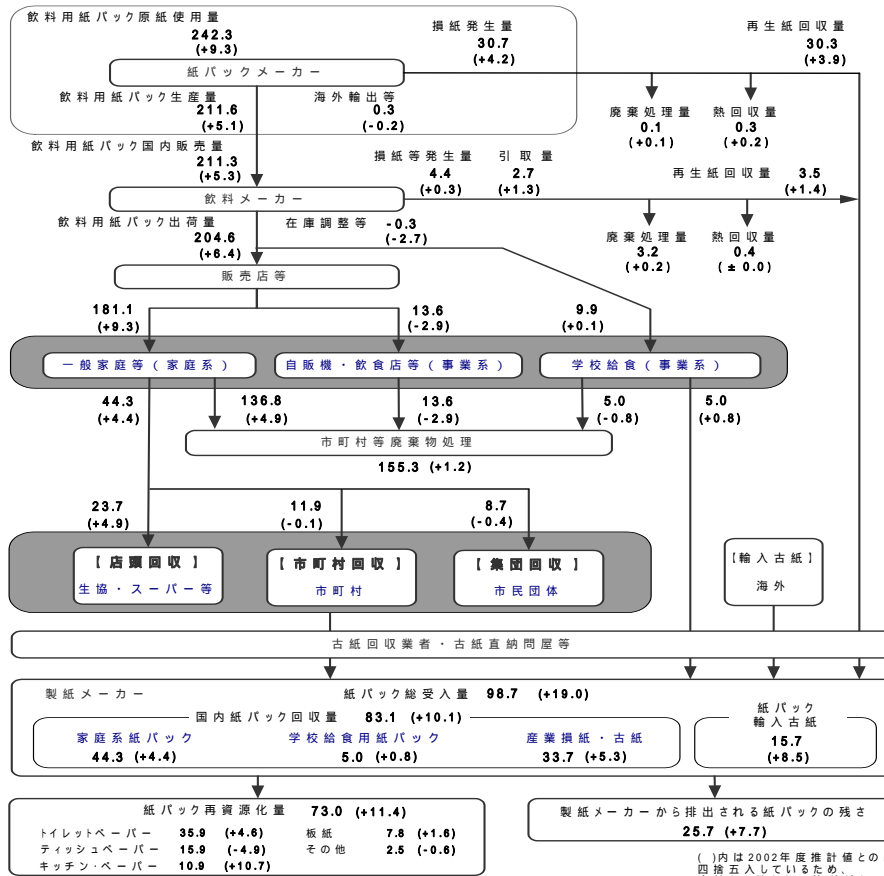


2003年度紙パックマテリアルフロー(推計値)

全国牛乳容器環境協議会調べ

2003年度 紙パックのマテリアルフロー(推計値)

単位: 千トン



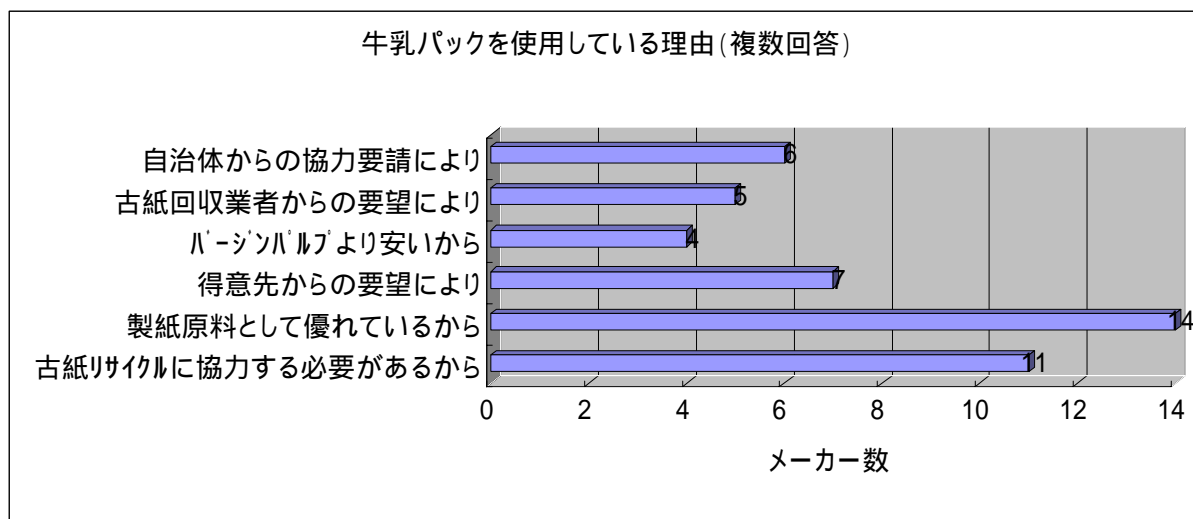
<牛乳パック受け入れ製紙メーカーマップ>

- =牛乳パック再利用マーク(パックマーク)認定工場
- ★=その他の製紙工場



2004年度製紙メーカーアンケート中間集計から

牛乳パックを受け入れメーカーが牛乳パックを使用している理由



「牛乳パックが製紙原料として優れているから」という理由が最も多く、品質を評価して積極的に受け入れていることがわかる。

2004年度製紙メーカーアンケート中間集計から

受け入れメーカーの牛乳パックに対する考え方

- 牛乳パックを受け入れている製紙メーカーの多くは「今まで以上の受け入れが可能」と回答。現状の設備でも現在の使用量の倍以上の量を受け入れることが可能という計算になる。牛乳パックの製紙原料としてのニーズは非常に高いと言える。
- 牛乳パックの引き取り価格は、持ち込みの場合が1キログラム当たり2～23円、引き取りに行く場合が0～20円。牛乳パックは最低でも無償、ほとんどの場合は有償で取り引きされており、しかも平均単価は新聞や雑誌、段ボールと比べてかなり高い。
- 製紙メーカーからの意見として
「製紙原料としての牛乳パックは品質的に優れており、今後も使用量を増やしたいと考えている。ただし、回収率が31.1%と低いため、集団回収、行政、メーカーが一体となり回収率を高める必要があると思われる。」
「牛乳パックを再生しやすいものに統一してほしい。」
「牛乳パックのリサイクルを促進するためにも、再生紙トイレトペーパーの消費量をもっと増やしてほしい」
「フィルム屑の処理をボイラー燃料として焼却費用を払って処分しているため、経費が高くなっている。」
「ポリエチレンフィルムの処理など牛乳パック再生にかかるコストの軽減が大きな課題」

回収事例紹介

福祉作業所による回収 尼崎市

みんなの労働文化センター

・平成2年から、障害者の仕事として牛乳パックの回収事業に取り組んでいた尼崎市の作業所。容器包装リサイクル法施行を前に「牛乳パックの回収は従来通り市民の手で、コミュニケーションを育みながら続けていきたい」との思いから、作業を通じて交流のあった「尼崎消費者協会」「大庄街づくり協議会」とともに「**尼崎パックルネット**」を発足

・設立後、回収拠点は70カ所から130カ所まで増え、市内67小中学校のうち、37校が回収拠点として協力している。現在、**1カ月約14トン**を回収。

・回収拠点から牛乳パックを引き取る業務を担当しているのは、みんなの労働文化センターのメンバー。毎日、2台の車に分乗してスーパーや市場、学校などに集まった牛乳パックを引き取り、保管先の市内の業者に持ち込んでいる。尼崎市は、広報や回収ボックスの設置、拠点拡大などで協力。事業所との協力関係も広めている。

・さらに、牛乳パックの回収をきっかけとして環境問題について考えてもらおうと、学校などから依頼を受け、メンバーが学校を訪れ、環境学習の機会を提供している。その学習の成果によって、学校から集まる牛乳パックはきれいに洗って切り開かれている。



福祉作業所やシルバー人材センターによる紙漉き事業

■ 町田市シルバー人材センター

会員3700名から寄せられる牛乳パックをすべて原料に使用。(推計7t/年)

高齢者の知識と地球資源を生かす大作戦と銘打って、牛乳パックを再利用した紙漉き事業を15年以上継続。環境教育などの指導に近隣の学校へ精力的に、出向している。

■ 紙好き交流センター麦の会

約180箇所の福祉作業所や企業が参画している作業所の仕事づくりネットワーク。

ユニセフのはがきやビール会社のPB商品も手がけている。(推計10t/年)

学校給食用牛乳パックのリサイクル

経緯

学校給食牛乳の供給量のうち、約2/3をしめる学乳パック。ダイオキシン規制により乳業メーカーが持ち帰った学乳パックを焼却処理できなくなり、リサイクルの方向性に検討が進んでいる。



問題点

水、手間、時間などを理由に学校現場からの反対の声が多く、理解を得るのに時間を要する。

今後に向けて

実施している学校からは、環境教育の教材として最たる物とリサイクルの成果の評価も高く、取り組みを希望する学校へのきめ細かな情報や用具の提供が必要。学乳を供給する乳業メーカーのリサイクルに向けた積極的な取り組みを。

容器包装リサイクル法への要望

■ 既存のシステムへの配慮

リサイクル率に反映されていない集団回収や、福祉作業所、シルバー人材センター等の回収量、使用量を把握することは難しいが、これらの活動は、循環型社会づくりの実践として重要であり、法律改正では既存のシステムに影響が出ないような配慮を。

■ 効率の良いルート作りのために

関係者(行政、回収業者、再生メーカー、中身メーカー、量販店、回収グループ等)が協議の場がなく、情報や認識の行き違いが生じている。

他の古紙との混合収集し、回収後に手選別を行っている自治体もあるが、効率の良い収集を地域ぐるみで考えていけるよう、自治体への情報提供、あるいは他の機関との連携によるルート作りのサポートが必要

■ 一般消費者の意識の底上げを

容器包装リサイクル法は、市民、行政、企業の役割分担を基本としている。さらに消費者に向けたPRを。

■ 排出側事業者の一層の努力を

啓発以外に、回収先やルートのない地域をどのようにサポートしていくか事業者としての具体的な取り組みを業界全体で進めていって欲しい。